

中国

中国華北鉄道の想い出

北海道 濱 忠 助

一 長崎から上海間の連絡船の沈没

上海に渡るには、連絡船で長崎から上海に一昼夜で行き来していたものです。

当時はシャレて「長崎県上海市」といわれたくらい、実にこの航路は良く利用されていたものでした。

船は上海丸、長崎丸で割に立派な船で船内には郵便局もあり、風景印も備えマニアに喜ばれていた。

私共家族も十四年九月この連絡船で中国に渡ったものです。十七年頃から日米関係が悪化し、大正十二年

来の日華連絡船が、次々と魚雷攻撃を受け二隻共沈没し、これに代わる船がなく上海―南京揚子江を渡り津浦線を経由して北京に、ここから朝鮮經由で釜山まで二昼夜もかゝるようになった。

この連絡船の沈没は、最近まで魚雷攻撃を受けたものとはかり思っていたが、長崎市の記事では、長崎丸五千六百吨は昭和十七年五月十七日長崎港外、伊王島沖で日本軍が敷設した機雷に触れ沈没したという。

この沈没で多数の犠牲者が出て、出島の三菱会館が遺体収容所となり、涙をさそったということである。

又上海丸五千三百吨は、昭和十八年十月三十日中国揚子江の東方四十哩の沖合で、日本軍の南方兵員輸送船、崎戸丸一万吨と衝突して沈没したことが事実であった。

この時は約四百人の乗員と乗客は皆無事に崎戸丸に救助されたという。情報の不備か又は軍事的秘密に扱われたものか、我々中国在住の日本人には、その事実を知らされず、国籍不明の潜水艦の攻撃に依り沈没したとばかり思っていたものです。

二 海杭線の襲撃

昭和十三年六月中旬、軍属として上海に上陸、嘉興の保線区長として鉄道の保線に当たっていた。当時は夜になると毎夜の如く敵襲があり沿線には五キロか七キロ毎に下士哨を配置して警備に当たっていたものであるが、大部隊の攻撃となると、線路、橋梁の爆破で夜の明けるのを待ってこの応急工事に出動修理したものである。

着任一か月ぐらい過ぎた七月十八日嘉善―七星橋間の橋が爆破され線路五百メートルくらい一度に取外され、この復旧に出動、四時間くらいで橋梁二か所と線路を修復し、待機していた下り列車により試運転をするべく、現地から携帯電話で打合わせを行っていたところ、突然二百メートルくらいの竹林の中から機銃と

迫撃砲によって襲撃された。

敵の弾が線路のどちらからとも知らず、只伏せていたが警備兵に反対側に伏せるようにと注意され立上がるわけにもゆかず、やっと難を逃れたものです。

この時は誰も負傷者も出なく、三十分くらいで撃退したものの皆な生きた心地はしなかった。もう心配はないと云う警備兵の言葉により試運転を行い線路を開通させたが、鉄道線路の襲撃は毎夜のように繰返されていたものである。

三 淮南線の撤収

昭和十九年四月蘇州保線区技術助役より、大通保線区長に転勤させられた時、上司より大通は出先機関との折合いが余り良くない保線区なのでその点を充分念頭に置いて行動するようにとの注意があった。

着任して現地各機関の挨拶に回ったところ(憲兵隊、地区警備隊、領事館、警察)警察の署長が北海道岩見沢市出身と云うことで話がすっきり合い、非常に良く面倒を見てくれるようになり、トラブルのあつた事柄もすっきり解決することとなった。

淮南線は割に敵襲事故には見舞われずに済んだが、使用されていたレールが二十五キロその道床が軟弱なため、よく脱線してその復旧に追われていたものである。

我々現地者には知られていなかったが軍の上層部に於て淮南線の転用計画がす、められ淮南線約二百キロを二分割、その内南半分約百キロを裕溪口方面に、北半分を大通、水家湖に撤収集結すること、この北面の保線区長を担任、昭和十九年某月某日開始と軍の命令を待つことになった。

その間に所要の資材、ガソリン等軍より支給を受け、要員計画も充分練ってその日を待った。

鉄道が新しく敷設されると云うことは地区住民の経済に与える影響の多いこと、これに反して撤収される地区の住民はどれほど悲しく、不利益となるか、そのための妨害が行われるのが非常に心配されていたものであった。

撤収の命令が下された日は朝からの豪雨で体はずぶ濡れ、靴はふやけ底が剥がれる始末で散々であった。

初日の作業はそのため予定の半分もできない状況であったが翌日からは一キロ、二キロ、三キロと仕事の馴れもあって一日に六キロも撤収、心配した妨害もなく約一か月で撤収作戦が完了し撤収材料の検査を受け、その管理を命ぜられたものである。

敗戦となり昭和二十一年四月に引揚げとなった。

人生を狂わした引揚げ

埼玉県 石山 幸

私は、昭和十五年四月、大阪の住友本社へ入社、同年十一月、住友本社北京事務所（住友公司）に転勤、昭和十九年二月現地召集、昭和二十年九月召集解除、住友公司に戻り、残務整理をして、同年十二月二十四日、命からがら実家にたどりついた。

昭和二十年九月、私は済南（秀嶺部隊）にいた。突然現地召集者は召集解除する旨の伝達があり、単身済南から北京まで長い時間を費やして会社にもどった。